

## 『藤野先生』と藤野巖九郎（一）

葛谷 登

### 縁起

昨年の二〇一一年は魯迅の生誕一三〇周年に当たった。この年の九月二十四日から二十六日まで彼の故郷である浙江省は紹興にて「二〇一一魯迅論壇・論壇国際學術研討会」が開催された。日本からも幾たりか、名立たる魯迅研究者が招かれた。「会議指南」の「正式代表者録」には山田敬三氏（神戸大学、「關於魯迅的古小説觀」報告）、工藤貴正氏（愛知県立大学、「從現代（modern）文芸思潮看“前期魯迅”的開端」報告）、小川利康氏（早稲田大学、「周氏兄弟の時差——白樺派与厨川白村的影响」報告）、藤井省三氏（東京大学、「村上春樹（一Q八四）中的阿Q之亡靈」報告）、長佃佑造氏（慶應義塾大学、「魯迅与胡愈之——魯迅為什麼拒絕赴蘇聯療養」報告）、代田智明氏（東京大学、「作為治癒文學的魯迅」報告）のいずれ劣らぬ錚錚たる斯界の第一人者が名を列ねている。わたくしなどは門外漢に等しい。そのわたくしが呼ばれたのは今回の学会の運営主体の中国魯迅研究会の事務局長が畏友の趙京華さんだったことと関係がある。現在、中国社会科学院文学研究所で活躍の趙京華さんは日本における魯迅及び周作人研究で新境地を切り開かれた木山英雄先生の膝下に学び一橋大学で周作人研

究により学位を取得されている。不肖のわたくしとは言わば同門の間柄である。

以前、北京に趙京華さんをお訪ねしたことがあった。そのときわたしは臆面もなく、魯迅の短編小説「藤野先生」について得々と愚見を述べ立てる失態を演じた。しかし趙さんは最後まで素人談議を一笑に付すことをしなかった。その頃のことであったか、わたくしは岩村康生さんの編集で同学社発行の『トンシユエ』という小冊子の第三七号（二〇〇九年二月十日）の中に忝くも『藤野先生』の『日暮里』という拙文を掲載していただいた。その中で、魯迅が弘文学院での学びを終え、東京を離れて仙台に辿り着くまでには存在しなかった「日暮里」という駅の名称の創作上の意味について愚考を重ねてみたのである。その後、趙京華さんが来日の折はるばる豊橋を訪ねてくれたことがあった。談論の後、分かれ際に駅のホームで拙文を渡したように思う。

これらの話や文章に素人談議の域は超えていないにせよ、なにほどの意味を趙京華さんは認めてくれたのかも知れない。果たして昨年の春、趙京華さんから大会参加への慫慂があった。わたくしもこの学術研討会の中国における重みを熟知せぬまま、無謀にも応諾の返事を送った。言わば、暴虎馮河の勇を振るう形となった。話したいこと、というより話せることは「藤野先生」についての断想数片でしかない。話柄についてあれこれ思い悩む必要はなかった。「藤野先生」については『トンシユエ』第二二号（二〇〇一年十月二十日）にも「惜別」「藤野先生」と題する拙文を掲載させていただいている。これは太宰治の小説「惜別」に些か感ずるところがあつて字句を列ねたものである。その拙文を書き列ねる過程で、当時愛知大学文学部中国文学科に在籍しておられた鈴木雅宣さんから福井県あわら市の藤野巖九郎記念館のことを教えていただくことが出来た。鈴木雅宣さんはかねがね日中関係のことさらに関心をお持ちで、卒業論文作成のため同記念館を訪問された由であつ

た。そのおかげで知らず識らず、小説「藤野先生」と人間藤野巖九郎への興味や関心がわたくしの中で膨んで行ったように思う。鈴木雅宣さんに感謝する次第である。

わたくしは大会参加の慥懣があった年の前年度の二〇一〇年度まで愛知大学中国文学科の小山澄夫先生のお世話で中国文学科の学生さんと一緒に中国の近現代文学の作品を読む機会に恵まれた。その作品の一つが魯迅の「藤野先生」であった。当初この作品は出だしの「東京也無非是這樣。」のような二重否定の表現に文体としての特徴があるように感ぜられたくらいで、表面の字句をなぞる限りにおいて晦渋なところは見出せなかった。ところが、折々に事実と突き合わせて読み進めて行くと、段々と難解さを覚えるようになったのである。

わたくしが「藤野先生」の奥行きの深さに気づき始めた頃、愛知大学の中国文学科は新規の募集を行なわないうことになった。ふり返れば、隔世の感がある。旧制愛知大学は一九四六年（昭和二十年）十一月十五日に設立が認可され、翌一九四七年（昭和二十二年）一月十五日に予科の学生の入学式が行なわれた（一）。十四名の予科教授の中に漢文担当の斉伯守氏、中国語担当の鈴木沢郎氏、桑島信一氏がいて、十二名の予科講師の中に中国語担当の池上貞一氏がいた。いずれも東亜同文書院の関係者であった（二）。その後、一九四九年（昭和二十四年）二月二日に新制愛知大学の設置が正式に認可され、法経学部と文学部の二学部が開設されることになり、一九五二年（昭和二十七年）に新制愛知大学はその完成を見たのである（三）。十二名の文学部の教授の中に、中国語担当の鈴木沢郎氏、東洋思想史及び漢文担当の斉伯守氏がいた（四）。そして一九五〇年（昭和二十五年）度以降文学部着任予定の教員の中に小野忍氏と尾坂徳司氏がいて、彼らの担当科目はいずれも中国文学であった（五）。尾坂徳司氏は前東亜同文書院大学講師であった（六）。草創期の文学部の中国関連の科目には東亜同

文書院の学統が脈打っていたことが窺われる。この学統の特徴は同時代中国を強く志向する問題意識を有していたことではないであろうか。愛知大学の中国文学科はこのような礎石の上に築かれて新世紀への門をくぐった。

今後愛知大学中国文学科の在籍者名簿に新たな文学が書き加えられなくなったことは、わたくしにとつて学生さんとの「藤野先生」味読の共同作業の終了を意味するものであった。これまで多くの労を惜しまず味読の機会を提供してくださった中国文学科の小山澄夫先生に満腔の謝意を表したい。かたがたこの際、拙い読書の営みを通して得られた実りを八方かき集めて、小山先生と学生さん献ずることが出来ればと願う次第である。

わたくしは魯迅研究を専門とする徒ではない。これまでの研究の精密な俯瞰図を持ち合わせてもいない。当然述べるところは重複や的外れの点が少なくないであろう。ただ、わたくしは明治維新を分岐点にして江戸時代までの中国への景仰の姿勢が侵略の態勢に転じて行つた特異な近代日本の歴史の深層を知りたいという年来的の思いから、その関心の途上で森鷗外などの人物を軸にした医学史の流れも学ばせていただいたことがあった。愛知大学語学教育研究室『言語と文化』第二二号（二〇〇五年一月）の中に掲載された研究ノート『世界の禪者』鈴木大拙のつばやき―鷗外、漱石、大拙―がそれである。鈴木大拙に重心を置いて書き始めたものが、終わってみれば森鷗外にそれが移動していたのであった（七）。従つて、文学的な観点からの魯迅研究に疎いわたくしであつても止まり木がないわけでもないものであり、門外漢の談といえどもあながち無意味とは言ひ切れないのではないか、と我田引水式に想像するものである。

すでに仙台時代の魯迅については、仙台における魯迅の記録を調べる会（同会事務局阿部兼也編者代表）編『仙台における魯迅の記録』（平凡社、一九七八年）という浩瀚な資料集と阿部兼也『魯迅の仙台時代―魯迅の日本

『留学の研究』（東北大学出版会、一九九九年初版、二〇〇〇年改訂版）という内容濃密なる研究書が世に出ている。前者についてはその「あとがき」により調査活動が長期間にわたったものであり、大勢の協力者を得てなされた大規模な作業であったことが分かる（八）。同書では、第四章「藤野先生」、第六章「その後の医専と藤野先生」において藤野厳九郎に関する資料をまとまって提供してくれる。更に、「付録編」においては藤野厳九郎その人の手になる「謹んで周樹人様を憶ふ」という文章などが収められている（九）。また、後者は前者に編者代表として関わった阿部兼也氏の博士論文を母体として書かれたものだけに仙台時代の魯迅研究としての凝縮度が高い（十）。同書では、序章「医学から文学へ（一）」、第一章「医学から文学へ（二）」、第二章「清国留学生と仙台市是『教育』」、第七章「魯迅と仙台医学専門学校」において仙台時代の魯迅について論ぜられている（一一）。これらはいずれも記録を拠りどころに展開された秀逸な論である。

わたくしは勇を鼓して報告の準備に取りかかった。作業はもっぱら『仙台における魯迅の記録』を頼りに行なった。かくして、報告までの間には阿部兼也氏のご高著の成果を充分に学び取らせていただく時間的余裕がないまま、草稿に書き上げた拙文を趙京華さんが三分の一ほどに圧縮して中国語の文章にしてくださいました。これが研討会当日に配布された『論文集』（下冊）の「魯迅經典本文解説」の項目に『藤野先生』と題して掲載された。瓦文を玉文に作り変えてくださった趙京華さんに深く感謝するものである。報告はわたくしの貧しき中国語により九月二五日の日曜日の午後に行なわれた。その日の午前中は天主教会を訪ねた。ほど近くに旧跡として名の知れた八字橋があり、そこには今なお、魯迅の小説の世界と一体のクリークのある風景が残されている。余韻を胸に抱いて報告の番を待った。王保生先生が司会で、王嘉良先生が論評者であられた。外国人による中国語の発表というこ

とで王嘉良先生は論評に手加減を加えられたのではないであらうか。咸亨酒店の中流西庁の部屋に同席した日本人研究者の談によれば、評価は思いの外好意的であつたようである。言わずもがな、拙い報告に推薦者の立場からその場に留まって忍耐して耳を傾けてくださつた趙京華さんの存在に負うところが少なくない。記して感謝する。

## はじめに

作品「藤野先生」魯迅の未完の大作ではないかというのが爾来抱いている感想である。というのもこの作品は細部の仕上げを意図的に、或いはやむを得ざる事情により控えているように思えてならないからである。それはあたかも逃避行の車中にて膝の上に鞆を載せ、それを下敷きにしてやつとの思いで原稿用紙にペンを走らせ、目的地の駅に到着するやかろうじて書き上げた原稿をそのまま郵便ポストに投函したかのような倉卒さを感じさせる。

一例を挙げたい。ノート事件のとき、或る日「本級的学生会幹事」（傍点はわたくし。以下同じ）すなわち「本学年の学生会の幹事」が「我寓」、すなわち「わたしの下宿」を訪ねたことになっている。しかし、魯迅の仙台医専での級友鈴木逸太氏は「仙台における魯迅の記録を調べる会」による一九七四年八月八日の聴き取り調査の中で、「ここに書いてある学生会つてのはありませんな。同級会つてのはあつたけれどもですね」（一二）と述べ、「学生会」という名称の存在に疑義を呈している。そしてこの「同級会」という名称は「藤野先生」という作品の中では「学生会」という語が出ている段落の次の次の段落のところで「因為要開同級会、干事便在黑板上写广告」

という文の中に現われている。ここでの「同級会」は「同学年の会合」ほどの意味であるであろう。

この「同級会」は鈴木逸太氏の述べる「同級会」とどのような関係にあるのであろうか。聴き取り調査ではその直後で、「一はあ、一年から四年まで各学年に。『はい。だいたいみな……』」（一三）と述べ、学年単位の組織のことを「同級会」と言っているようである。鈴木逸太氏の言う「同級会」が仙台医専の中の学生組織の一つであつてみれば、これは一種の固有名詞の部類に属するであらう。しかし、小説「藤野先生」の中に記されている「同級会」はそれよりもっと一般的な同学年の会合を指しているのではないかと感ぜられ、それならば普通名詞の性格を帯びることになるであらう。魯迅が「藤野先生」の中で用いている「同級会」という語が広く一般的な意味での同学年の会合を指すものなのか、それとも仙台医専特有の学年単位の組織を指すものなのか判然としないものを覚える。これが仙台医専の学内組織としての「同級会」を指し示すものであれば、それと特定されるような修辭上の徴表が付与されていても良いように思われるからである。

当時、仙台医専には教員と学生から構成される「東北医学会」という名称の組織があり、「会員は教官・在学生（正会員）、卒業生（特別会員）」と、会の功勞者（賛助会員）からなる。（一四）というものであつた。というのも、同会は「第二高等学校医学部学友会」と、『己丑倶楽部』（同校の同窓会）とが、明治二十四年五月に合体して成立した。（一五）ものであるからである。それは学生、教員、卒業生の三者が一体化した組織であつたわけだが、日常的には教員と学生によつて運営されていたものであろう。「東北医学会規則」の第七条には、「本会々務ヲ処理センガ為左ノ役員ヲ置ク 会長 一名 副会長 一名 幹事長 一名 幹事 若干名……」（一六）とあるから、或いはこの「幹事」の中に各学年から選出された学生が入っていた可能性がある。果たして、

魯迅が一九〇六年(明治三九年)に仙台医專を去るにあたって送別会を開いた四人の同級生鈴木逸太、杉村宅朗、山崎喜三、青木今朝雄の四氏のうち青木、山崎の二氏が東北医学会の学生「幹事」の経験者であり、青木氏の場合は一九〇三年(明治三六年)六月から一九〇五年(明治三八年)六月まで及び一九〇七年(明治四〇年)六月から一九〇八年(明治四一年)六月までの二回、また山崎氏の場合は一九〇五年(明治三八年)六月から一九一〇年(明治四三年)十月まで幹事の仕事に携わった(二七)。他方、鈴木逸太氏は一九〇四年(明治三七年)九月にクラスを代表して教員と学生との間のパイプ役のような存在の「総代」の務めに就いた(一八)。鈴木逸太氏は「同級会」という名称を肯定しておられる(一九)。

ノート事件当時において魯迅のほど近いところに、後に魯迅送別の宴を張ることになる東北医学会学生「幹事」の青木今朝雄氏や山崎喜三氏と魯迅の医学科第一年時にクラスの「総代」であった鈴木逸太氏がいたわけである。鈴木逸太氏の言う「同級会」なる名称が存在していたとすれば、「総代」とはともかく学年とのつながりの濃い「同級会」の代表を指すことになりはしないであろうか。「総代」は鈴木逸太氏によれば「幹事」とも呼ばれていたようであるから(二〇)、鈴木逸太氏は「同級会」の「総代」、別称「幹事」の立場にあったことになる。つまり、魯迅の交友範囲内に東北医学会の学生「幹事」であった青木今朝雄氏や山崎喜三氏及び「同級会」の「幹事」であった鈴木逸太氏が位置したのではないであろうか。

つまり、魯迅が仙台医專在学当時において二種類の「幹事」の存在を知っていた可能性が相当程度高いことになる。それゆえ「藤野先生」の中で最初に出て来る「学生会干事」は東北医学会の学生「幹事」に、次に出て来る「干事」は「同級会」の「幹事」に比定することが可能であるかも知れない。しかし、魯迅は最初に出



て来る「学生会干事」には「本級的」、つまり本学年のという意味の修飾語句を置いてから複雑である。東北医学会規則には「幹事 若干名」と記されているだけである。学生の「幹事」は必ずしも各学年から選出されるものとは限らないとすれば、「藤野先生」の中に見られる「学生会」とは鈴木逸太氏がその名称を認めたところの組織としての「同級会」の単なる言い換えと見なされ得ないであろうか。更にこの「同級会」の語の直後に出て来る「干事」（因為要開同級会干事便在黑板上写广告）、は初出の「学生会干事」、すなわち鈴木逸太氏の言う「同級会」の「幹事」であるところの「総代」に当たるであろう。ただ「藤野先生」の中に出て来る「同級会」は組織というよりは、単なる会合を指しているように思われる。煎じつめれば、「学生会干事」、すなわち組織としての「同級会」の「幹事」、つまり「総代」がクラスの会合としての「同級会」を召集したということになるのではないであろうか。

それならば何故、魯迅は鈴木逸太氏によれば實在せぬ「学生会」という語を一方で用いつつ、實在した「同級会」という語を用いているのであろうか。「藤野先生」という作品が発表された時は一九二六年十二月十日であるが（二一）、魯迅が仙台医専を後にしたのは一九〇六年三月のことである（二二）から、二十年という歳月の隔たりにより東北医学会学生会の「幹事」とクラスの「総代」であるところの「同級会」の「幹事」との差異に関わる記憶が曖昧なものになったのであろうか。或いはそうかも知れない。ただ、当時仙台医専にあつて「同級会」という名称は組織と会合の二つの意味を兼ね備えていたとするならば、魯迅は最初に組織としての「同級会」の意味で「学生会」という語を用い、後で会合としての意味で「同級会」という語を用いたことになりはしまいか。つまり、「学生会」と「同級会」という語の併用は当時の日本の高等教育機関の学内組織の用語に通ぜぬ中国人の読

者を慮つての措辞ということになるかも知れない。断言を憚かる。充分な性格づけの言葉が附されないまま並べられた二つの語の徑庭は埋まりそうにもないように覚えるからである。

更に問題は残る。魯迅の一年時でのクラスの総代は鈴木逸太氏である。一九七四年八月八日の鈴木逸太氏への聴き取り調査の記録に「ノート事件」という項目があり、「——ノート事件について、幹事（かんじ）がしたと書いてありますが、学生の側にも連絡にあたる係みたいな者はいたんでしうか。『ええ、あの、いました。それは。だけど幹事（かんじ）つてー。あのあたりの幹事（かんじ）つてのはわたしがやったんだがな……。だからそういうわたしがそんなことをやるわけがないんで、これはおかしいね』（二三）とある。また、同年六月三〇日の同氏への聴き取り調査の記録には「試験問題漏洩事件について」という項目があり、「——魯迅は試験問題漏洩事件について書いていますが、『……わたしはもう、そんな馬鹿な事あるかと言つて取り消してすな、藤野先生にわたしは行つて話したことがあるんです。こういう話があるんだが、先生、無論ほくは信じないけれども、こういう噂がありましたから、ちよつとお耳に入れておきますと。それは有難う。そんなことは君ないよと藤野先生はそう言つて、そういう場合はわたしがみなのもとめ役というか、そういう事をやつておつたので、ええ、ありました』（二四）とあり、その後、『……この事件はあつたわけですか、噂として。』……藤野先生にも話しましたが、そういう事件は全然ないぞと言つて、みなを集めて話したことがある。それは覚えています。』（二五）とある。

この中で鈴木逸太氏はクラスの「幹事」、すなわちクラスの代表の「総代」として藤野厳九郎を訪ね、ノート事件の真偽を正したうえで、クラスの学生を集めてその報告をしたと述べておられる。これは魯迅の弁護を意図したのであらうけれども、魯迅への疑惑が払拭されていない行為のようにも見える。解剖学の試験を行なつ

た藤野先生を訪ねるべきは中傷により名誉を害われた魯迅その人であるまいか。知己としては魯迅の置かれた状況を慮り理解と共感をもって見守り、まずは道徳的支援を供することが考えられはしまいか。実際、小説「藤野先生」はそのような仕立てになっている（二二六）。そもそもクラスの代表格の学生が魯迅の潔白をクラスの全員を集めて知らせたという事実も確認されていないのではないか（二二七）。藤野厳九郎も事件の当事者の一人である。彼の打ち消しの言葉は十分な説得力を待ち合わせていないと言わざるを得ないであろう。これでは報告の持つ客観性の土台が揺らいでしまう。魯迅その人は自分の苦悩を藤野厳九郎に訴えることもなく、はたまた日本人の学生に解決の方途を尋ねることもなく、ひたすら沈黙を守って耐え抜いたというのが実相に近いのではないのであろうか。

果たして魯迅が一八九二年に十一歳で三味書屋に入塾した翌年の一八九三年に祖父周福清は科挙に關係する事件で罪せられ、一家は困難に直面したのであった（二一八）。魯迅にとって試験に関わる問題は一家の命運を決した幼少期の原体験として内面に深く刻印されていたことであろうから、異国の地での同次元の事件は存立の基盤を奪う身悶えするような体験であったに違いない。彼はたとえようもない孤立無援の絶望の淵に立たされたつつも、強靱な復原力をもって辛うじて自らを持したのであったのであろうか。

このように「藤野先生」という小説は読むほどに闇が深まり行くのを覚える。これから、愛知大学文学部中国文学科の学生さんと共に学生さんの協力を得て「藤野先生」を読み進んで行った道すがら、折々に教えられたことや知らされたことを基にあれやこれや考え合わせてみては思い至ったことを開陳させていただきたい。炯眼の士のご高教を仰ぎたく思う。

注

(一) 愛知大学二十年史編集委員会編集『愛知大学 二十年の歩み』(愛知大学、一九七二年)第一章「創始期」第一節「胎動」(三七頁)。入学式の直前頃に陸軍の便箋を用いて謄写版で最初の「愛知大学要覧」が出されたようである(同頁)。尚、今回依拠したものは、二十年史発行当時、愛知大学教養部講師として英語、英文学特殊講義を担当され、現在は基督伝道隊福岡大濠公園教会牧師として伝道のお働きをされておられる榎本和義先生から何年か前にいただいたものである。記して感謝す。

(二) 同書第二章「建設期」第一節「旧制大学時代(昭和二三・一〜二四・三)」(一〇三頁)。齊伯氏は大東文化学院卒で前東亜同文書院大学教授、鈴木氏は同文書院卒で前東亜同文書院大学教授、桑島氏は同文書院卒であり(一〇三頁)、池上氏は同文書院卒で前東亜同文書院大学講師であった(一〇四頁)。綺羅星の如く同文書院に連なる人たちが中国関係の科目を担当していたことが分かる。

(三) 同書同章同節(一一五頁及び一一七頁)。

(四) 同書同章同節(一一八頁)。

(五) 同書同章同節(一二二頁)。

(六) 同書第一章第一節(二九頁)。愛知大学豊橋図書館所蔵『愛知大學要覧 昭和二七年度』「9. 教職員」の「文學部」の箇所、小野氏は東大文学部卒で中国研究所員であり、中国文学史、中国文学特殊講義を受け持ち、尾坂氏は北京大学卒で法政大学講師であり、中国文学概論を教えたことが記されている(一五頁)。

(七) 「世界の禅者」鈴木大拙のつぶやき「鵬外、漱石、大拙」の「追記」(『言語と文化』第一二号、二〇〇五年一月、一五八頁〜一六三頁)にそのことが示されているように思う。このとき、伊達一男「医師としての森鵬外」(續文堂出版、一九八一年)などの医学史的な観点からの鵬外研究の恩恵を享受させていただいたように記憶する。

(八) 仙台における魯迅の記録を調べる会編『仙台における魯迅の記録』平凡社、一九七八年、四一四～四二四頁。「仙台における魯迅の記録を調べる会」の会長米沢正二郎の「序文」には、「一九七三年秋以来、魯迅来仙七十周年記念事業として、『仙台における魯迅の記録を調べる会』を結成し、調査活動をつづけてきた。周辺の事実に関するものまで含めて、かなりの資料が収集された。いまその大要をまとめて発表するものである。……」(一頁)とある。

(九) 「付録編」に藤野巖九郎関係の資料として他に、坪田和雄・川崎義盛・牧野久信「故魯迅の敬慕する『藤野先生』」(三七三一三七六頁)や飯野太郎「仙台医学専門学校時代の魯迅について」(三七七―三八〇頁)及び「藤野巖九郎略年譜」が収められている(三九九―四〇三頁)。

(十) 阿部兼也「魯迅の仙台時代―魯迅の日本留学の研究」(東北大学出版会、二〇〇〇年改訂版)の「あとがき」に、「本書は一九九二年に、東北大学文学研究科に博士学位の請求のために提出した論稿をもとにして、その後補強・修訂を経たものである。学位は一九九三年に授与された。」(三八三頁)とある。編者代表として「仙台における魯迅の記録」を世に送ってから、「どうもうまく納得できない点が、少なくとも二つあった。一つが上述の解剖学学年試験問題漏洩の噂についてであり、もう一つは幻灯についてである。」(「あとがき」、三八三頁)という事情から、本書は編集作業の過程で得られた問題意識を土台にして書かれたものであるのではないであろうか。

(一一) 同書は魯迅の幼少期から仙台医学専門学校留学までの学問遍歴の全体像を照射しており、その全体像の中で仙台時代の魯迅の学業生活の特質を明らかにしようとするものであるのではないであろうか。

(一二) 仙台における魯迅の記録を調べる会(阿部兼也代表)編『仙台における魯迅の記録』(平凡社、一九七八年)第三章「在学時代の周樹人」二「同級生の談話」一七四頁。

(一三) 同書、同頁。

(一四) 同書第二章「周樹人入学前後の仙台医学専門学校、四二頁。

(二五) 同書同章、五六頁。

(二六) 同書同章、五六―五七頁。

(二七) 同書第五章「離仙台前後の周樹人」、三〇三―三〇四頁。

(二八) 同書同章、三〇五頁。「総代」の役割の性格に関しては一九七四年六月三〇日の鈴木逸太氏への聴き取り調査(一五三頁)、同年八月八日の同氏への聴き取り調査(一七〇頁)、並びに一九七五年一月二九日の薄場実氏への電話(一九三頁)の記録を通してその輪郭が分かるように思う。これらのこと知り得たのはいずれにも同書巻末の索引の力に負うところが大きい。特に注記しないが、他の箇所においても同様である。索引作成の労を取られた方々に感謝したい。

(二九) 「同級会」という語は鈴木逸太氏への聴き取り記録にしか出て来ていない(一七四頁)。それによれば、「同級会」は各学年の組織であり、学年をまたぐ全体の組織としての「学生会」はなかったようである。同書の「談話採録リスト」には二二回にわたる調査の内訳(対象者、方法、日時、場所)が掲載されている(一九五―一九六頁)。これらが出来るだけまとめて公表されれば、「同級会」についてももう少し具体的にその姿が分かる糸口が得られるかも知れない。とは言え、臆測の域を出るものではあり得ない。

(二〇) 同書第三章二「同級生の談話」にある一九七四年六月三〇日の鈴木逸太氏への聴き取り調査の記録には、「わたしが幹事だったもんで、そういう役をやっておったもんですから。……今という級長ですかね。そんな事やっておったもんですから、交渉はすべて引き受けてきてやりました」(一五三頁)とある。そのすぐ後に「幹事役の正式呼称は総代である」と筆録の立場からの補足の注記が付されている。

(二一) 原作は一九三六年二月一〇日の『芥原』第一卷第三三期に発表された(銭理群、王得后編『魯迅散文』浙江文芸出版社、一九九九年、一二三頁)。小説「藤野先生」の末尾に、「十月十二日」と日付が付されている。魯迅は一九二六年十月十二日に本作品を書き終えたものであろう。

(二二) 前掲『仙台における魯迅の記録』付録編「在仙時代の周樹人年譜」には、「退学手続をせずに東京へもどる。」(三九八頁)とある。

(二三) 同書第三章二「同級生の談話」、一七四頁。

(二四) 同書、一五三頁。

(二五) 同書、一五三頁。

(二六) 「我便將這事告知了藤野先生・有幾箇和我熟識的同学也很不平、一同去詰責干事托辭檢查的無礼、并且要求他們將檢查的結果、發表出來。」前掲『魯迅散文』、一二二頁。

(二七) 前掲阿部兼也『魯迅の仙台時代』において取り上げられた(三一八頁)ところの鈴木逸太氏の聴き取り調査の記録の箇所(仙台における魯迅の記録「一五三頁」)についても、これが事実であったかどうかは議論されてはいない。また、「同書に記録された談話が、すべて事実だというのではない。」(三五三頁)とも記されている。過去の事実へ肉薄することの難しさを痛感させられる。

(二八) 前掲阿部兼也『魯迅の仙台時代』Ⅱ「魯迅の生涯」、一九八〇年七五—一〇九頁。飯倉正平『魯迅』講談社「人類の知的遺産」第三章「魯迅の学校歴・学生生活」、六一—六六頁。

## 追記 一

三宅俊彦『東北・常磐線一二〇年の歩み』(グランプリ出版、二〇〇四年)によれば「『翌明治三十七年二月、日露戦争の宣戦布告の影響により官設鉄道や山陽鉄道に続いて『特別運行』ダイヤを実施した。『特別運行』は一般列車の運行を停止し、軍用列車を優先とするダイヤとするものである。』(二九頁)とあるように、魯迅が仙台に赴いた当時、日露戦争により日本鉄道も他

の鉄道に足並みを合わせたように軍事優先のダイヤを強いられた。魯迅はその目撃者なのであるが、些かもそのことについては言及していない。小説「藤野先生」が一つの定点から構成された作品であることを想起させるものであろう。

## 追記 二

四月十一日（水）に拙文を文学会事務室の渡邊さよ子さんにお渡しした後、五月十八日（金）に『中国研究』（日中出版）の一九七八年十一月号に、阿部兼也・渡辺襄「仙台時代の周樹人―『藤野先生』研究によせて」（五二―六二頁）という高論を初めて読む機会を得た。遅きに失したことを憾みとせざるを得ない。「試験問題漏洩の噂」の箇所には、「作品では、下宿にノートを検査に来た人物を『クラスの学生会幹事』（原文＝本級的学生会干事）とするが『学生会』にあたる組織は、存在していなかった。あり得る場合を推測すると、東北医学会であり『幹事』に相当する者は、その二年級学生幹事か、クラスの総代である。当時二年級学生幹事は、小島延吉、鬼川俊三の両氏であり、クラス総代は鈴逸太氏であった。」（五八頁）とある。

これによれば、東北医学会の学生幹事は各学年にいた。小島延吉氏と鬼川俊三氏の名前は『仙台における魯迅の記録』の「索引」には出て来ない。呈示された貴重な事実の前に覺然たる思いになる。また「学生会」という名称の虚構性も取り上げてある。汗顔の至りである。拙論では「学生会」と「同級会」の関係如何について愚考を重ねてみたものである。最早見るべくもないが、観点に些か異なるものがあるのではないかと臆測し、敢てそのまま掲載させていただいた。ご寛恕を願う。

## 追記 三

わたしは今回拙文を列ねるに当たり、フランクルの『夜と霧』を思い出さざるを得なかった。フランクルは言う。

だから「その真只中」にあった者は、全く客観的な判断をなし得るには確かにあまり僅かな距離しかもたないにせよ――まさ



に彼のみがこの体験を知っているのである。……ただ重要なのは、所謂私的プライベートなことを叙述からできるだけ排除し、しかしもし必要ならば、体験の個人的な叙述をする勇氣をもつことなのである（『霜山徳爾訳、みすず書房、一九七一年、八一頁』）。このフランクルの見方からすれば、魯迅の小説「藤野先生」は実存主義文学の系譜に位置することになるのではないであろうか。自らを語ることへの懊悩を克服する勇氣は一貫した明晰な構成力を要するであろう。それによって作品の基づく事実と作品中に築かれた虚構はつながり行くもののように思われる。（二〇二二年六月二十日記）

